

ジャータカのボサツ から大乘の菩薩へ

そこでめざしたものは、一部の専門家の仏教から一般に開かれた仏教へということ、部派仏教では阿羅漢果しか得られないとしていたのを大乘では誰でも万人が成仏できると説いています。みずから菩薩となって修行をすれば成仏できるとし、その菩薩の基本的精神は己が救われる（自利）よりも他人の救済（利他）を優先するという自未度先度他という考え方です。

この菩薩思想はその淵源は原始仏教に求めることができるということとは以前にふれましたが、ボサツという呼称そのものはジャータカで釈尊の前世の修行時代の呼称としてもっぱら用いられました。

ジャータカは非常に親しみやすい説話でありたとえば兎のジャータカ物語はつぎのようなものです。

「ある山の中に仙人が住んでいて、そのまわりに兎、猿、獺^{かわうそ}、豺^{さい}がおり、いつもその仙人の説法を聞きながら暮らしていました。猿と獺と豺はそのお礼にと自分が捕ってきた獲物をもってきて仙人に捧げていました。それぞれ、果物や魚や肉など。けれども、兎だけは仙人の食べるようなものはもって来ようにも捕ることもできずに嘆いておりました。

そこで、思いついたのは、枯れ枝などを拾い集めて火を燃やし、その中に自分の身を投げ入れて仙人の食に供しようということでした。

兎は、本当にそれを実行しようと思い、飛び込んだ所、天の助けにより火は消えて兎は助かり帝釈天は兎の徳を永久に世界に示すため、月の中に兎の姿を描かせました。」

と、というような誰でもわかり感動する話が沢山あります。いろいろな動物、鳥や鹿、亀、猿、竜王、また、人間として太子であったり主人公はいろいろな姿ですが、今日の釈尊はその前世の善行によって悟りを開かれたのだという話です。

また、一角仙人物語はインド古来の話でしたが仏教の本生譚に取り入れられ、それが多分、大智度論から今昔物語を経て謡曲の「一角仙人」となり、ついで劇の「鳴神上人」として今も歌舞伎に演ぜられています。

このジャータカに出てくるボサツはあくまでも釈尊の前世の姿であり、たった一人です。ところが、大乘仏教の菩薩は一人ではなく、多数の発心をした人々であり、全くその菩薩に対する考え方が違うのです。

そこで、その考えの違いがどこから生まれてきたかということと大衆部の教理の中の願生の菩薩思想です。大衆部と云うのは、上座部とは思想傾向を異にする部派仏教の一派の雄です。

【願生の菩薩とは有情（生きとし生けるもの）を救済するために願って悪趣に生ずる菩薩、これに対するのは業生】

「菩薩は有情を饒益するために、自発的に願いを起こして好んで悪趣に生まれ、思うがままにゆくのである」という意味のことが異部宗輪論（世友の著と言われる）という論書の中で大衆部の教義を説明紹介する所に出て参ります。（大正大蔵経49巻15C）

願生の菩薩は自分で願って、誓願して生まれてくるのであり、それに対して業生の一般の人は自分の過去の業によって運命的に、好むと好まざるにかかわらず、生まれてきてしまうのであり、全然人生に対する心構え、取り組み方が違ってくるのです。願生という考え方をするところに、積極的な未来に向かう姿勢が生まれ、ここに人生の解放があると言ってもよいでしょう。ジャータカのボサツから大乘の菩薩への飛躍によって信仰者たちは大いに希望を奮い立たせられたことでしょう。

これは、信仰者たちが大衆部などの小乗の部派仏教から受けた恩恵とすれば、また、部派仏教から学んだマイナス面もあったことでしょう。

それは、大乘菩薩道の矮小化、煩雑化、形式化です。本来、菩薩は在家と出家を超越した人間のあり方ですが、いきおい現実から遊離をして、自分だけの悟りを求め閑

静な山林などに居住したりして一人、飛花落葉を見て十二因縁の理を觀ずる縁覺（独覺）と僧院の中で煩瑣な阿毘達磨の研究と議論に明け暮れる声聞（釈尊の声を聞く弟子たち及びその末裔）の二乗者を批判するようになります。その結果、二乗に対立する大乘となってしまう。

大乘運動は本来の仏教に帰る、仏教の大衆化、普遍化の運動であったはずが、人数が増え、組織化されてくると最初の精神を忘れ、超越的な菩薩という概念さえ二乗に対する一つの階層としてみずからを秩序に組み入れていきます。

ジャータカのボサツをひたすら仰ぎ、仏徳を慕って仏塔を建立したり、四大霊場を巡礼したり、信仰の道を懸命に歩もうとした人々は、その構成の比率からいえば在家の信者の方が圧倒的に多かったであろうことは推測できます。けれどもその中で専門的に在家の人々の中から仏塔を管理したり、世話をしたり法を説く人が出現したり、あるいは部派仏教出身の比丘、比丘尼の中から転向をして大乘の教団に入るものも出てきたでしょう。その結果、次第に、大乘仏教の教理も複雑化をしてみいきます。また、信者や専門家など構成員も多くなれば当然、小乗の戒律と同じくらい煩瑣な、何か規律がなければおさまりがつかなくなることも団体の生活をしてゆけば当然のことです。

修行道としても、単に菩薩は上は菩提を求め、下は衆生を化すという単純な精神論ではなく、専門家と一般信者の階層化を意図的に果たすためにも、修行の複雑化と修行者である菩薩の階位が立てられるようになることは容易に想像できます。

修行としては六波羅蜜を嚆矢として、様々な修行が立てられましたが、ジャータカなどでは六波羅蜜のうち、最初の布施と忍辱の二波羅蜜が強調されるだけで、あと少し精進が説かれるだけでした。持戒波羅蜜、禅定波羅蜜と智慧波羅蜜は説かれることが殆どなかったとのこと。ちなみに波羅蜜と言うのは P " r a m i t " というサンスクリットの音訳で、意味は「到彼岸」、「彼岸つまり迷いの世界と対極にある悟りの世界に至った」と羅什は訳し、今の学者は「完成をした」と訳すことが多い言葉

です。更に後で成立した六波羅蜜のうちの戒波羅蜜、即ち戒律の面でも菩薩の守るべき戒として十善戒のみが説かれていましたが、この十善戒は在家の信者の守る戒律です。けれども、後には部派仏教の戒律を取り入れて、比丘、比丘尼は具足戒を受けて波羅提目叉（戒本と訳す、僧伽すなわち教団に入った比丘、比丘尼が守るべき規則）を守るという具合です。

階位としても最初は般若経の初発意の菩薩、久発意の菩薩、不退転（阿惟越致）の菩薩、さらに一生補処（つぎの生涯で仏となる）の菩薩というように四つの段階が設けられ（小品般若経から始まる）、つぎに声聞を加えた階位として凡夫地、声聞地、辟支仏地、（菩薩地）、如来地の四地、五地、また、小品般若経の共の十地（声聞、縁覚、菩薩の三乗の階位が含まれている十地）さらに仏伝文学で考えられ華嚴系統の経典で取りあげられている不共の十地というように沢山の位が設けられるようになり、詳しいことは専門でないのでわかりませんが、恐らく、最初は菩薩の位に差別はなかったのが、ごく簡単な区別をつけるようになり、しだいに部派仏教の影響で小乗の階位を借用して菩薩の階位を分けるようになり、次に小乗との対立を意識して、菩薩の下に声聞、縁覚の位をつけ加えたのではないのでしょうか。そこにさらに古くから仏伝文学に説かれるボサツの十地を利用して華嚴経などで不共の十地をうち立てたのではないかと思えます。

そして、この大乘の菩薩達は教団を構成していて、在家の菩薩と出家の菩薩の区別がありました。最初のうちは戒律でも両者ともに同じ在家の十善戒のみを守るだけでしたから、部派仏教の声聞僧伽とは大いに異なっていた訳です。説法をする人は法師（ダルマバーナカ dharmabhāṅka）といわれ、この法師には在家でも女性でもなることができたのが大きな特徴です。法師は塔寺（Stūpa）や阿蘭若処（āraṇyaka 山林、原野など人里はなれた静かな修行に適する場所、遠離処）に住み、在家菩薩の指導をしたり禅定の修行をしたのです。

声聞僧伽では人間の平等をうたわれた釈尊の教えに知らず知らず反するようになっ

て古代からの身分制度であるヴァルナ・カースト制度は廃したかわり、四向四果という修行上の階位を設けることにより、一般の在家の信者は成仏もおろか、阿羅漢果という聖者の位にも到達できないものとされ、実質上の差別が生まれてまいりました。

そういう硬直した部派仏教のあり方、特に上座部のあり方と平行してきたのが信仰を中心とする仏教者であり、その流れは遠く釈尊のご在世の時代の在家の信者、あるいはご入滅直後の信者にまでさかのぼることができるようです。そして特に西紀前後からは大乘仏教運動が興隆してきて、しだいに上座部などの小乗部派仏教を意識して対立するようになってきました。いわば一切の平等を唱えられた釈尊の根本精神に帰る一大革新運動が大乘仏教です。

けれども、これも時代が経つうちに、せっかくの革新の風潮も段々と失われて、いつしか大乘の大乘たるところが色あせてきて、小乗と同じような道をたどるようになりました。

なかには大乘のうちでも異なる経典を信奉する教団同士の争い、一方的迫害さえ起こった可能性があります。また、部派仏教に対する度を過ぎた蔑視も起こり、声聞、縁覚の二乗を敗種、焦種と呼び、腐敗したり焦げた種からは決して芽も出ないし実もならないように、大乘経典では二乗の成仏は絶対に不可能と決めつけられたのです。

けれども果たして、これが大乘の真の姿でしょうか、そうではなく、大乘仏教というのなら本来はもっと寛容で、もっと包容力があり、人々を理想の世界に導く教えであったはずです。

しかし大乘の中でも法華経は一般の大乘の経典とは違い、二乗の成仏と久遠の本仏という他に類を見ないすばらしい教理を持つ経典で、インド、中央アジア、チベットなど広い範囲に流布され、更に漢訳され、日本の仏教にいちばん影響を与えました。